

負債と終焉

結婚して6年後の1963年5月に待望の娘を授かり、夫と私は幸せの絶頂にいた。娘がかわいい盛りになんじくくらぶ制作の映画「怪談」が企画され、私は2話の「雪

私の履歴書

子 恵 岸

②

女」への出演を依頼された。娘や夫と別れての長期撮影は辛かった。けれどにんじんくらぶは映画界の常識を破り、器々たる非難をものともせず、私が久我美子さん、有馬稲子さんとともに設立した日本初めての女優3人による独立プロダクションである。

「怪談」は小林正樹監督の野心が膨らみ、贅を尽くした撮影になった。「雪女」の撮影は長さ2500メートルある飛行機の格納庫に京都のペンキ屋さんを総動員して空を塗り描き、すすき野を作った。

空に浮かぶ雲は唇、目、太陽に図画化され、カンヌ国際映画祭の出品作にもなった。だが映画祭の上映前夜、試写で批評家から「太陽がダリの肝心の久我さんや有馬さん

を引き受けていた。彼は優れた芸術家だったが有能な経営者ではなかった。制作費(約3億円)の超過分の多くはにんじんくらぶの負担になる。にんじんくらぶは次々と大作映画を世に送り出し、俳優陣も増えて豪華な大所帯になったが、「怪談」の制作で負債が膨らみ、所属俳優が1人抜け、2人抜け、

次々大作、超過した予算

ノーギャラ出演続けるも俳優離脱

作品を模している」と批判され、小林監督は4部オムニバスの2作目で私が演じる「雪女」をカットしてしまった。

夫や友人に囲まれて映画祭に出席した私はひどい失望と屈辱感に打ちのめされた。だが「怪談」は審査員特別賞を獲得し、世界各国で上映された。東宝は多額の収益を得たと思

うが、代表の若槻繁さんは東宝から約1億円の契約で制作を差されたのは「岸恵子に貸した500万円」という新聞記事を読んだ時。半紙の片隅に書いた私のサインを使って借借書が作られ、私への貸出金として500万円が若槻さんに渡っていたのだ。まったく身に覚えのない話だった。ひどいショックを受けたが、若槻さんもさぞかし辛かった

「にんじんくらぶ」の終焉だった。月日がたち、米映画「ザ・ヤクザ」に出演中の私を若槻さんが京都まで訪ねてきた。「恵子ちゃん、初心に帰って作家になってほしい」私の名前を明記した新しい会社のパンフレットには私が書く予定とされる小説の作品名まで記載されていた。どんな表情で首を横に振ったか覚えていない。がっくりと肩を落として立ち去る姿が私が見た彼の最後だった。その寂しい姿が今も胸に痛い。



にんじんくらぶの事務所で

ではないかと思う。私は人が良いのか、責任感が強すぎるのか、テレビドラマ「女・その愛のシリーズ」鶴八鶴次郎」にも無料で出演した。演者の多くが劇団民藝の方々だった。後日、飛行機で偶然お会いした奈良岡朋子さん(現劇団民藝代表)に劇

(女優)